

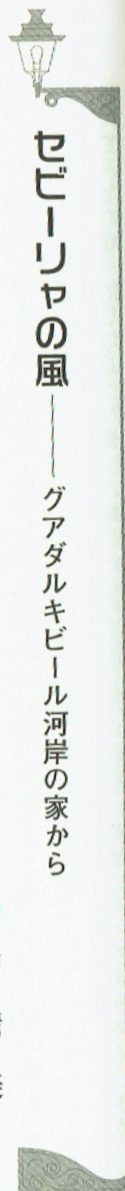
ただだ。アンダルシアのプエブロで、町の中に信号機がある所などほかに見たこともない。アロラは少しハイカラなプエブロなのだ。

アンダルシアの一日は長く、アロラの昼もそれと同じくらいに長い。そのすべての出来事をここに書くわけにもいかない。とにかく夏なら町はひととき死んだようになり、シエスタに入る。そしてそのあとは夜の部にと移っていくのだ。

町にはふた組の外国人の画家の家族が住んでいる。フランス人と日本人だ。フランス人の方は金持ちで、町の外れの、川の対岸にある崖の上に大きな屋敷を構えている。そのバルコニーからは、アロラの町全体が眺められる。少しくすんだ色を見せているが、ちょうど良い色合いの景色だ。一つ言いがたれたが、セントロの近くにはフラメンコクラブがあつて、その会長のグレゴリーは、いつも難しい顔をしている。そして、「あの男は女みたいな声を出すやつだ」と言つては、フラメンコのアーティストを腐くさしている。

夕方、フランス人の屋敷のバルコニーの手摺りに頬杖をついて眺めていると、アロラは下の方から二つ三つと蛍光灯の明かりが点つていく。それが、なんともいえない温もりのある風情に見えるのだ。アンダルシアの山岳地帯の入り口にあつて、アロラはやはり、どこか格式をもったプエブロなのだろう。

「ながみね・きよなり 作家」



セビーリヤの風

— グアダルキビール河岸の家から

山口 晴美

ロンドンのガトゥウィック空港を飛び立ったセビーリヤ行きの飛行機は揺れに揺れた。大西洋とイベリア半島の上空はまるで風のすべり台のようだ。機内食にも手をつけず、ただひたすら時の過ぎるのを待った。妙に静まりかえった機内、乗客の顔は、たしかに引きつっていた。イギリスからの飛行機なので、乗客のほとんどがイギリス人。ガマン強い国民性が、こんな時にわかるものだ。私は納得した。それにしても、大きなコブのあるスキー場を、スキーで滑り降りるように、上へ下へと飛行機は進んだ。にこやかに「お子さま、操縦席を見学なさいますか？」と話しかけてきたイベリア航空のステュワーデスはただ者ではない。

乗客の大きな拍手に満足そうにならずにステュワーデスに、「さよなら」と日本語で、ていねいにあいさつをして、足早にセビーリヤ空港に降り立った。ヨーロッパの南の果ての空港は思っていたよりずっと近代的だった。私たちの乗った飛行機が、あまりにもボロで古かったので、行き着く所もきつと、ひどい所に違いないと決めこんでいた。どうやら、イギリスで探した安いキップのせいで、ジ



はるかに「ヒラルダの塔」と手前にはグアダルキビール河が見える先生の家の屋上

体が二つあったらと思うほど。家主の名前は永川玲二さん、夫の大学院時代の先生である。先生がどんなにすごい方か私はいつも聞かされていた。でも私には違った意味で、すごい人だと思えた。こんな遠く離れたスペインの南の町で、三〇年間も、一人で暮ら

ッタツタツと小さい方の息子が走り出した。「飛行機、揺れたけど、来て良かったね！」と私はつぶやいた。

家主は留守だった。路地の右側のいちばん奥がその人の家だった。外の階段で待とうと家の横に付いている階段に腰をおろした。マリア像が、すぐ右上から見おろしている。息子の一人が階段を上って行った。「わあーっ、すげえ」その声に皆が階段を上った。大きな河が見えた。すぐ脇を流れるグアダルキビール河。四人とも、ほっとした気持ちで河を眺めていた。青い空に白い家々、オレンジ色の屋根。トリアナ地区と呼ばれるセビーリヤでも古い特別の地区の昼さがり……。やがて、家主が戻ってきて、四人に加わり、五人はごく自然に、いっしょに白い家の屋上でグアダルキビール河を見つめた。河にまつわる昔の話や、歴史も知らない息子たちに河はどう見えたのだろうか。私一人がコロンブスの時代に思いをめぐらしたり、このあたりが、かつて金銀の荷のおろし場所だったことや新大陸を目ざして出航する船や帰航する船でにぎわったところの「黄金郷の門」を想像しながら、感激にひたっていたのだろうか。

それからこの家に滞在した日々の忙しさは、すさまじかった。

体



タイルモザイクのマリア像
(119頁の写真参照)

エットコースターなんて問題じゃあない、本物のスリルを味わえたと、小さな感動を覚えながら、空港ロビーを通り抜け、その人の待つ街へとタクシーに乗りこんだ。近代的で広い道路をタクシードライバーはジュンビュン飛ばし、やがて大きな河を渡り、狭くてゴチャゴチャとした温かい雰囲気のある街角で止まった。

「荷物持つてよ」「自分で持てよ」「お腹空いた」と、飛行機の中では口数が少なく、めずらしくおとなしかった息子たちが、いつもの調子を取り戻した。タクシーが止まった大通りから右へ、石畳の小道をちよつと行ったところの鉄ごうしの扉の前に立ち、

その向こう側の、アンダルシアのパティオの絵ハガキのような光景に、言葉もなく見とれた。扉から奥に続く白い壁と緑のドア、そのドアのまわりに所狭しと掛けられた花の鉢々。路地のつきあたりの壁にあるタイルザイクで描かれたマリア像がこちらを見おろしている。マリア像を見上げながら、私は出発前の会話を思い出していた。「セビーリヤのホテルは街の真ん中がいいね」「いや、ホテルは使わない。先生のところにする」「えーっ、迷惑よ、きつと。うちの子うるさいよ。よけいな気を使うのいやだなあ」「いや、いいんだ」……。なかから住人の一人らしい老人が近づいてきた。「ナガカワ？」というと、老人は腰につるした様々の鍵の中から、ジャラジャラと音をたてて扉の鍵を探した。私と子どもはゆっくりと路地に一步を踏み出して、絵のような風景の中に入った。夫は何度もここを訪れていたので、私たちにこの美しい風景を楽しませようと最後に路地に入ったのだろう。突然、タ

した人の、心の中は見れないけれど、初めてお会いしたその人の姿に「孤独」を越えた静けさを感じたのは私の思いすごしだろうか。あたりまえのことに、その日から五人暮らしが始まった。正直いって、ホテルに滞在したかったのには、もうひとつの大きな理由が私にはあった。普段の家事から逃れられるという主婦の一番の楽しみである。それに加えて、ちょっぴりにぎやかな子どもたちを注意するのは疲れるなあと私はずっと思い続けていた。けれども、屋上で永川先生にお会いした時に私は決めてしまった。家主に気を使うのはやめよう、そしてここに居候しよう。

「君たち観光に行つてらっしゃい。僕はシエスタだ」私たちは荷物を置いて街へ出かけた。

シエスタを終える頃、トリアナの先生の家に戻った。先生が大きなナスをオーブンで焼いて、焼きナスを作つてくださった。米を炊いて、持参したウメボシやフリカケも加わつて、夕食が始まった。もちろんスペインのワインで、飲めや歌えの宴というのではなく、「飲めや話せや」の終わりのない宴が続いた。私は途中でダウンしてしまった。アルコールが引き金となり、旅の疲れがどっと押しよせてきた。そして、翌日も、翌々日も、「飲めや話せや」の宴が繰り返された。

私たちはトリアナ地区にあるトリアナ市場へ五人で出かけた。私はすっかり主婦魂を取り戻し、食材を探して、市場の中を歩きまわつた。そんな時には必ず、下の子を永川先生にお願いした。じつとしているのが得意じゃないこの年頃の男の子は、やはり誰かにしっかりと手をつないでもらわないと迷子になること間違いなしなのです。すると、先生は、ちょっと困つたような緊張したような顔をなさつた。でも食いしん坊の私は「すみません」と子どもを先生に預けて夫と二人で買い物に熱中した。しばらくして戻つてみると、「おじいちゃん、こっち、こっち」とけっこう楽しそうにやっていた。

「おい、先生と呼ばせろよ」と夫が小声でいったが、「いいの、いいの、ここじゃあこの方が自然だもの」と私は特に気にしなかった。「おじいちゃん、これなー」と下の子がさかんに質問し、それに答える先生の顔は、初めて会つた時の表情から、にこやかな「おじいさん」になつていたように思われた。そして私たちは「飲めや話せや」の合間をぬつて、セビーリヤの観光をし、夕方、グアデルキビール河に沿つてある広い散歩道を「黄金の塔」をながめながら歩いた。夕暮れの散歩道は、私たちとは対象的にきちんと正装した幾組もの家族が、同じようにぶらりぶらりと散歩を楽しんでいた。パセオという習慣である。その日も、宴会は、あたりまえのように始まつたが、やはり何時に終わったのか私にはわからなかつた。

へとへとになつて、数日後の朝、セビーリヤ空港へたどり着いた。たくさんの思い出とワインの二日酔いで石のように重くなつた身体を乗せ、飛行機はセビーリヤに着いた時とは正反対の穏やかな空にむけて、軽々と飛び立った。

それから数年後、日本に來られた先生から突然電話があつた。元気そうな声だつた。その時、私は「父の最後」を見とる看病に故郷へ出発する寸前だつた。先生にお会いするのは、もう少しだけ先にしてと電話を切つた。そして、すべてにけりがついた頃、先生の居所が知れないという電話、やがて悲しい知らせ……。その知らせに私は絶句し、「二期一会」の真の意味を知らされた。

あの屋上で、いっしょに風に吹かれたあの日が忘れられなくなつてしまった。そして、セビーリヤが遠くなつていくように思えた。